



中庭と一体となり、
谷間から朝日の差し込む午前の間（キッチン・ダイニング）



6mのアプローチの
先に現れる谷底の中庭

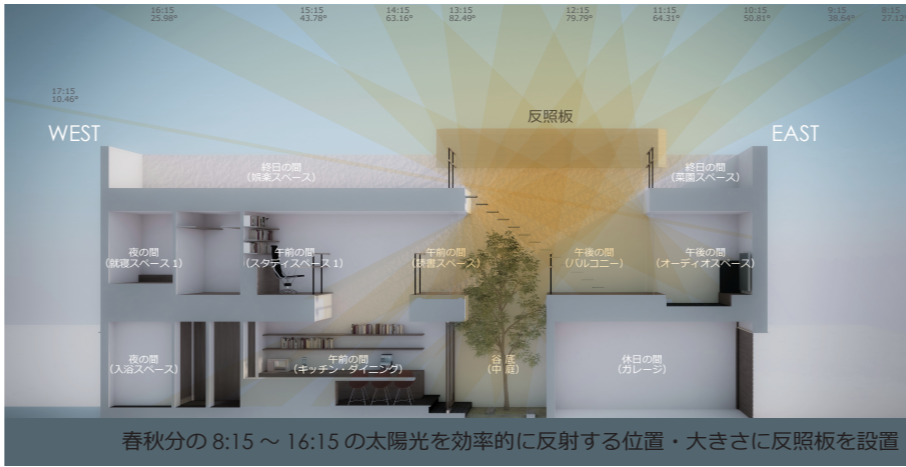
陽射す谷間のある家

設計者である私と妻、娘の3人の住宅。計画敷地は名古屋の中心部に近い近隣商業地域に位置し、商業店舗と住居が混在して立地している。周辺建物は前面道路まで建物のマスが配置されその壁面ラインが街並みを形成していたが、近年マンション化等が進む中でその街並みが崩れかけている。本住宅は本来あるべき街並みが取り戻されることを願い、隣地の建物が前面道路まで建物マスを建てやすくするために外周部への開口部を最小限に絞った上で建物内部への光の「導入」「反射」「拡散」「受光」を追求した。

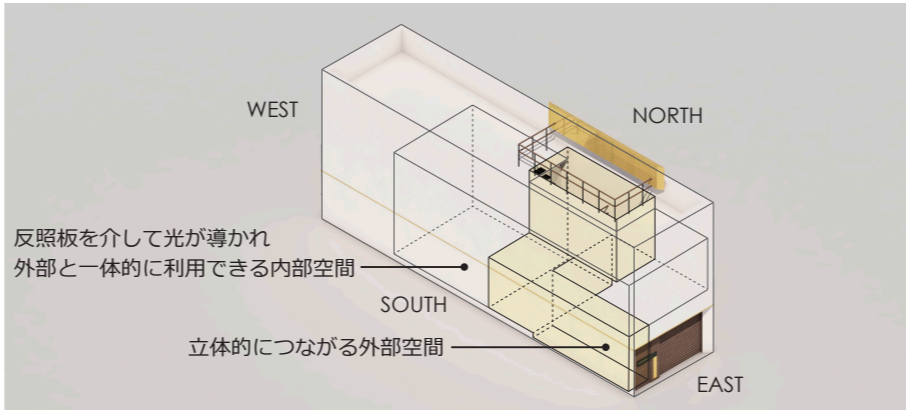


光の導入

建物中央付近に谷形状の外部空間を貫入し、太陽との位置関係で諸室の配置を決定した。午前の活動の中心である午前の間は谷間の南に、午後の活動の中心である午後の間は谷間の北に配置している。太陽光をあまり必要としない夜の間は南端、休日の間は北端に配置した。三方囲まれた外部空間は立体的につながり内部空間とも一体利用出来るほか、ほどよい光と風を感じられる中間領域として機能する。



春秋分の8:15 ~ 16:15の太陽光を効率的に反射する位置・大きさに反照板を設置



反照板を介して光が導かれ
外部と一体的に利用できる内部空間
立体的につながる外部空間

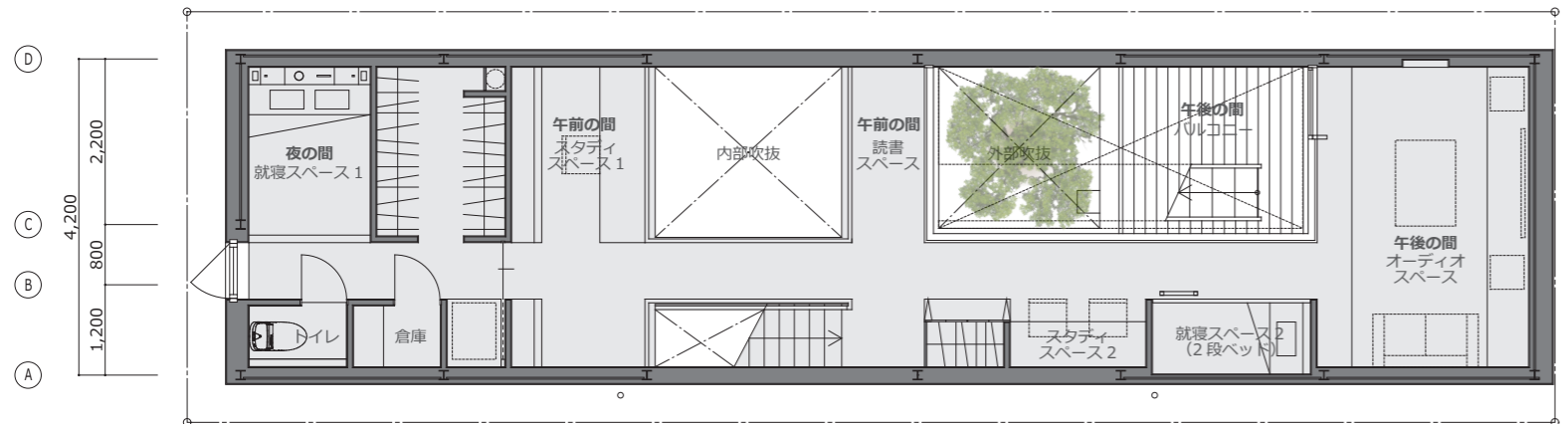
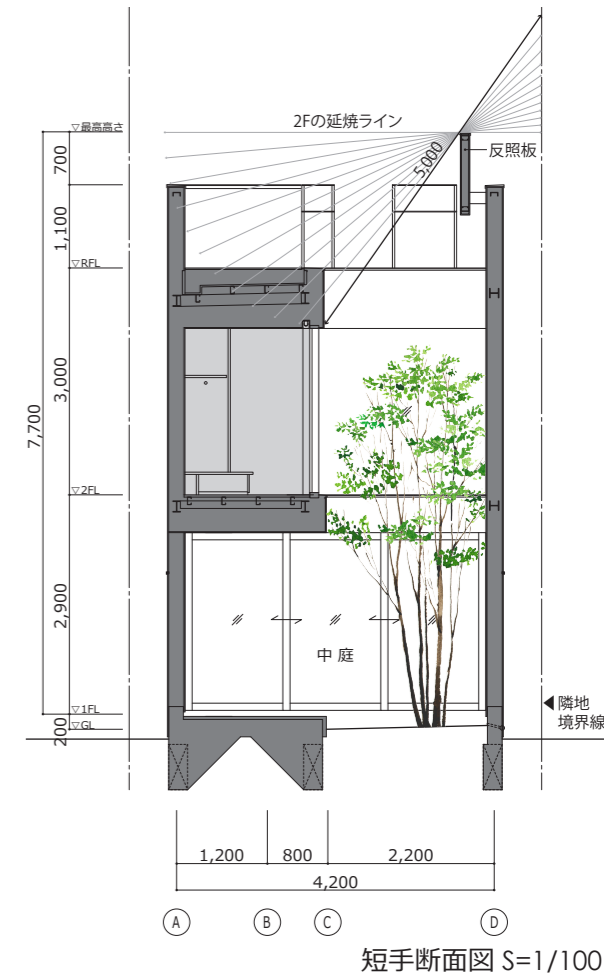
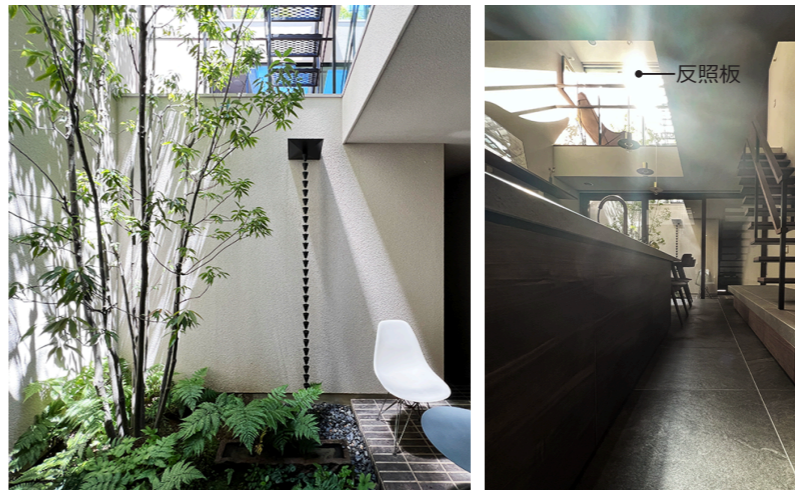
反射板により反射した太陽光を最大限に取り入れるサッシレスの大開口



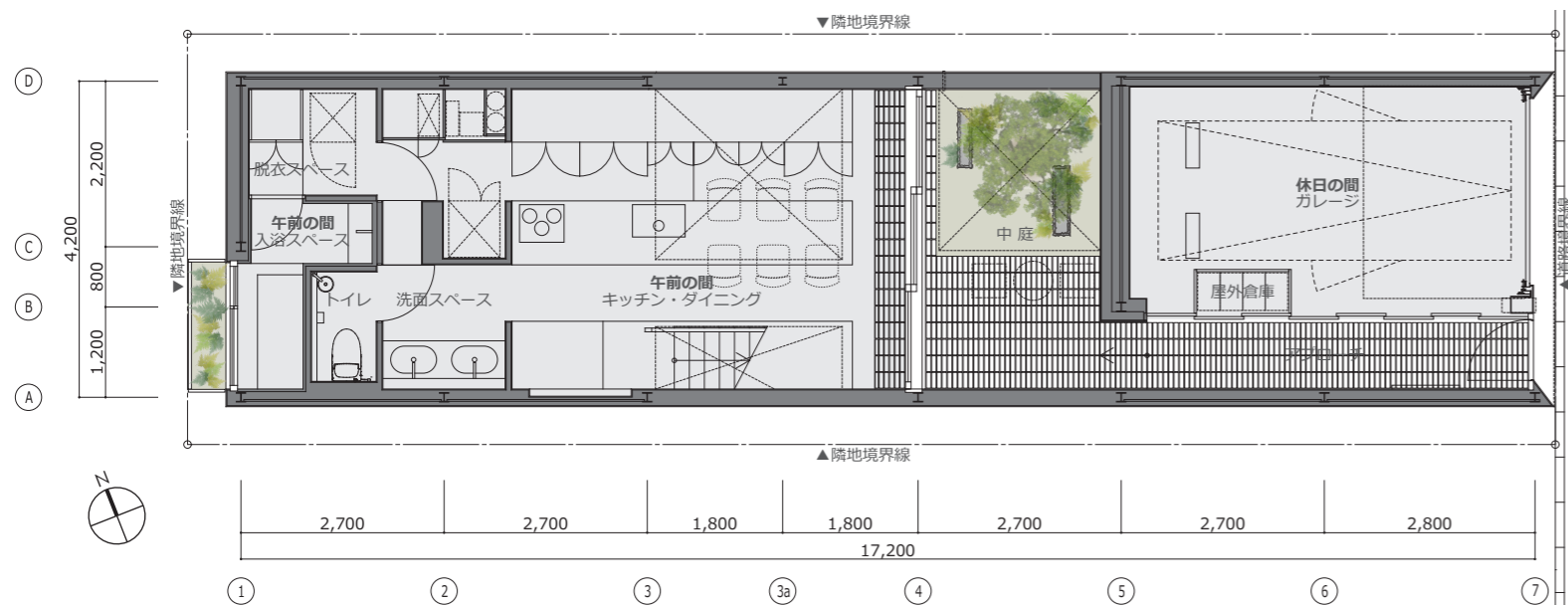
光の反射

建物内部の南側にも光を導くように谷の上部に反射板を設けた。設置位置と大きさは春秋分の太陽光を効率的に取り入れられるように計画したほか、反射の効果がしっかり得られるとともに反射光が強くなりすぎないようにするために反射率50%の素材を選定した。2階の中庭に面した大開口は可能な限り透明感を持たせたかったので非防火設備とする必要があり、サッシが延焼の恐れがある範囲から断面的に外れるように反射板は防火壁も兼ねて設計した。

反射板を介して本来日射しが入らない
吹抜より南側に強い日射しが入る（右手が南）



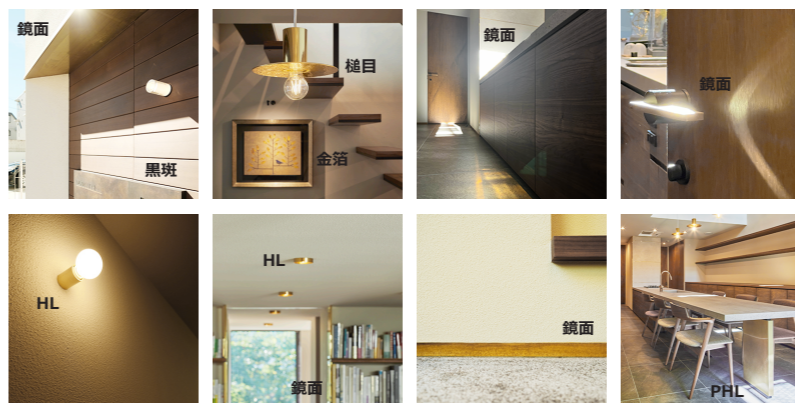
2階平面図 S=1/100



配置図 1階平面図 S=1/100

光の拡散

古の日本建築は軒により制御された太陽光が奥の間に設置された金屏風や金襖に反射し、薄い光を照り返している。この建物では細部（幅木、レバーハンドル、引手、目地、ブックエンド、照明、傘掛、タオル掛け、軒天、表札等）に真鍮を用いることや金箔を用いた日本画を飾ることで、反射板を介して取り込んだ太陽光をさらに反射させ、建物の奥まで明るさと彩を与えている。また、光との距離に合わせて真鍮の仕上げを「遠：鏡面→HL→PHL→槌目→黒斑塗装：近」とした。



光の受光

壁面は内外の領域を連続させるために同一素材とし、光の陰影を感じ取りやすいざらつきのある素材とした。壁は白に少し色味を与えた上でトーンを落とした色を採用することで、太陽光が強く当たった際には白、太陽光が弱く当たった際には壁本来の色、夜には照明の色となり、光の移ろいととも空間に変化を与えるようにした。

真鍮製の特注ペンダントライトが太陽光を反射させ天井を照らす

